

第九節 工・鉱業

一 工業

昭和二年に加世田市から黒瀬与之市氏が来て玉城字でかじ屋を始めた。その技術が優れていて沖永良部島民から信望された。また戦時中は越山の部隊で技術指導に当たり、その教え子たちが終戦後各地でかじ屋を始めた。

二 鉱業

和泊町における昭和初期の鉱業は和字のミジシヤにおけるアンチモニーの採掘であった。

大野勉正氏によって発見された鉱山は沖縄県出身の古城富太郎氏と通称「久へイ屋」が共同で権利を譲り受け、当時沖縄県宮古島で鉱山の仕事としていた柏誠之介氏

(茨城県出身)に鉱脈調査を依頼した結果、良質のアンチモニー鉱であると判明したので採掘一切を柏氏に委任した。沖永良部島には鉱夫がいないので、始良郡出身の神崎半次氏と四国出身の横川某氏の兩名が鉱夫として来島し、地元の若者(特に和字出身者)は見習い鉱夫として働いた。また女は選別(色分け)・運搬役として出夫した。昭和十八年まで続いたがその後戦時中で輸送ができず閉鎖した。

ヒージョー一帯のマンガンやアンチモニー採掘のために奥川の水量が減ったと言われている。